書評

第113号

【特集】

短評　おすすめの本6冊

【連載】

日本中国　ことばの往来（ゆきき）　その58　芝田　稔
《研究余滴》フランス詩の歴史（その七）　山村嘉己
おいてけぼり―宮本輝試論X―　芝田啓治

関西大学生協組織部『書評』編集委員会

特集●短評……おすすめの本6冊

よくわかるダイオキシン汚染 …… 永井　憲 4
いじめ　教室の病 …… 鈴村まゆみ 6
ドイツを変えた10人の環境パイオニア …… 大塚　建夫 9
文学入門 …… 若松　武夫 12
生きるための学校 …… 烏丸　通夫 14
母は枯葉剤を浴びた　ダイオキシンの傷あと …… 榊　高尋 16

連載

日本中国ことばの往来（ゆきき）　その58 …… 芝田　稔 18
〈研究余滴〉フランス詩の歴史（その七） …… 山村　嘉己 24
おいてけぼり――宮本輝試論X―― …… 芝田　啓治 30
羅針盤 …… 1
編集後記 …… 36

題字■網干善教（元文学部教員）

1998.12 羅針盤

「静かな田園に囲まれた土地で、幸せに暮らせるものと考えていました」これは生協組織部が開催した「今、能勢町で何が起こっているのかーダイオキシン汚染を告発するー」講演会終了後、交流会の席上での灰掛典子さんの印象に残る言葉である。

確かに今年4月に豊能郡美化センター周辺地域が、高濃度のダイオキシンで汚染されているとマスコミ報道されるまでは、地元の人達は勿論、大阪府民や周辺地域の人々の能勢町に対するイメージも灰掛さんの言葉通りだったといえる。それは例えば「豊かな自然」であったり、「栗」や「ミネラル・ウォーター」を始めとする農作物や天然資源の宝庫であったり、たまの休日に訪れる人々にとっては「安らぎ」の場であったりした。

それがあのセンセーショナルなマスコミ報道以来一変した。以前では考えられない「危険な」「汚染された」所といったマイナス・イメージが少なからず付着してしまったのである。

ここで深く立ち入るつもりは無いが、マスコミのセンセーショナリズムによる報道姿勢は問題だろう。いうところの風評被害もこの点に依拠している。問題を矮小化させる意味にでは無く、現時点で高濃度汚染が検出された地域を豊能郡全体との面積上の比較の意味合いで言え

ば「一部の地域の問題」といえ無くはない。

実際に私が数人の仲間と、能勢町を訪問した際も、ダイオキシン汚染の町と過剰にマスコミ報道されるのとは裏腹に、町は平穏であり、立入禁止区域として一躍有名になった能勢高校農場周辺も訪れてみたが、所謂汚染区域としての物々しさは感じられなかった。能勢高校農場などは柵に施錠されているのと、立入禁止の立て看板が数ケ所かかっているだけで、敷地内に入ることも容易にできるし、「ここが本当にあの農場なのだろうか?」と疑問に思う程である。

しかし、能勢町や豊能町、大阪府を始め関係各省庁が「一部の地域の問題」と言う時は全く違った意味合いで用いられている。言外に「一部の地域」の人がおとなしくしていれば、問題は大きくならず、丸く収まるし、逆に「一部の地域」の人が「騒げ」ば、風評被害も大きくなり問題がこじれる、という意味が含まれているのである。

この文章が皆さんの目に触れる頃には、住民の皆さんの努力により、能勢町のダイオキシン汚染問題もかなりの進展を見せているだろう。

現時点（十月下旬）においてもすでに焼却炉の廃炉が決定しており、周辺住民に対する健康調査も様々な問題を指摘されながらも関係各省庁（私が知る限りでも、大阪府、厚生省、環境庁、労働省がそれぞれの領域において実施しているが、これなども住民本意では無く「縦割り」でやたらと「窓口」の多いお役所仕事の典型ではないかと思う。）により実施されている。

実際今回の問題に対する公害調停審査はかなりのハイペースで進められており、遅い審査進行は住民の差し迫った要求に答え切れないにしても、逆に早過ぎる進行も十分な審議が尽くされるのか疑問視されている程である。

話を先に触れた「一部の地域」と行政が用いる時の問題に戻そう。要するに問題の本質的な解決の方向（例えばゴミの減量化に向けた抜本的対策を全国規模で実施するとか）には向かわず、住民を「地域」内外に分け隔てる発想がなぜ何のためらいも無く出て来るのかという問題である。

つまり今回の問題を役所や企業の側がどう捉えているのか点検してみた場合、それは我々がこの間何度も何度も経験してきたいつも通りの「やり方」なのである。

今更一々例に出すのもうんざりだが、厚生省やミドリ十字等が引き起こした「薬害エイズ問題」、政府が被害者の方々に、明確な謝罪も補償も行わない「従軍慰安婦問題」、バブル経済崩壊直後から現在に至るまで不良債

権処理が放置され、結局我々の税金を投入することにより問題の解決が図られる金融問題、防衛庁が一丸となって証拠隠しを行った汚職事件等々挙げればきりが無い。

要するに間違いを犯した当事者は、「みんなで渡れば恐くない」といわんばかりに無責任になり、問題が大きくなってどうしようもなくなった時点で「トカゲのしっぽ切り」的に特定の人物に責任をおしつけるか、「渋々」部分的な補償に応じて問題の表面的な解決を図ろうとする。当然不十分なものにしかならないので、被害を被った側がそのことを指摘したり、追及したりすれば、その場凌ぎの対応をするか、黙って時が解決してくれるのを待つ。そしてあたかも問題が解決したような雰囲気を作り、被害者側がものを言いにくい状況を作り上げてしまうのである。

このような行政のあり方は少なくとも明治からこの方上っ面の手法の違いはあるものの、本質的なところでは何も変わっていないのだろう。

むしろここまで問題の所在がはっきりしているにも拘らず、相変わらず被害者を孤立させ、一部の良心的な人々にその支援の任務を押しつけている大多数の我々の側の不十分性が問われているのが、現代社会といえるのではないか。

無責任な者や沈黙している者が得をするのではなく、責任をもって、間違いを正せるものが主役になれる社会を実現させることが何よりも求められているのではないかと考える。もはや沈黙や無関心は許されざる行為の範疇に入りつつある。

（書評編集委員：市原　理）

短評

よくわかるダイオキシン汚染

宮田　秀明　著

合同出版／定価一四〇〇円

大阪府能勢町で起こったごみ焼却場周辺のダイオキシン汚染の問題は、大きな衝撃を周囲に与えた。まさかあんな緑豊かな土地で。環境汚染とは縁もゆかりもないような能勢町で、環境基準を大幅に上回る八五〇〇ピコグラム（一ピコグラムは一兆分の一グラム）もの高い濃度のダイオキシンが検出されたからだ。

それまでも、ダイオキシンという言葉が新聞やテレビで頻繁に聞かれてはいた。青酸カリやサリンといった猛毒よりもさらに強い毒性を持つダイオキシンが、ごみを焼却すれば発生するという事実は、それだけで充分注目に値する。日本全国には、産業廃棄物、一般廃棄物（家庭ごみ等）を問わず、多くのごみ焼却場があり、家庭や学校にも小規模ながら焼却炉があるからだ。日常的にそうした猛毒に触れているということには、恐怖を覚える。

だが一方で、ダイオキシンという言葉は最近聞き始めたものだし、そもそもどんなものか目でみたことが無い、ピコグラムやナノグラムなんてよくわからないと言う方は多いだろう。人体にどういう経路で入るのか、摂取するとどういう影響があるのか、マスコミに流れる情報量とは裏腹に、基本の所から知らないことが多いのではなかろうか。「人類が生み出した史上最強の毒物」と言われる化学物質・ダイオキシンとは一体いかなるものか。この問いに明解に答えてくれるのが、ここで取りあげる宮田秀明著『よくわかるダイオキシン汚染』である。

最近書店の棚にダイオキシン関連の本が顕著に見受けられるように、この分野の本はいくつかある。その中でこの本を選ぶのは著者がダイオキシン研究の第一人者だからだ。

さて、本書の構成を見てみよう。第一章ダイオキシン類とはなにか・第二章ダイオキシン類の性質と毒性の比較・第三章ダイオキシン類が引き起こした歴史的事件・第四章無毒性量、発がん、生殖毒性、環境ホル

モン様作用・第五章厚生省、環境庁の安全基準とは？・第六章ダイオキシン類の体内蓄積は？・第七章もっとも重大な母乳汚染・第八章ダイオキシン類の生成と発生量・第九章わが国の環境中のダイオキシン類濃度・第十章ごみ焼却場の問題点・第十一章厚生省の「新ガイドライン」と環境庁の「大気環境濃度」。第一章から順にダイオキシンという化学物質の性質、過去の事例、現在の汚染状況、問題点、今後の対策という風に、わかりやすく整理されている。

ところで、この問題に今後どう取り組めばよいか、著者の宮田氏は、廃棄物の排出削減と再利用の促進、それによる廃棄物焼却量の抑制を訴えている。また、ごみ焼却場以外の各種工場などの発生源についても早急に調査を行い、抑制対策を講ずるべきだと結んでいる。確かにそうだと思う。しかし、はたしてそれだけで済む話なのだろうか。

一般にごみ問題は、リサイクルや家庭ごみの分別・削減で語られがちだ。だが、リサイクルと言っても限界のあるものだ。例えばペットボトルは永久に使い回しできるものではない。アルミやスチール缶を再利用するには大量のエネルギーが必要だ。さらに廃棄物の削減についても一筋縄でいく話ではない。どうごみを減らすのか、それは結局、私たちの生活や社会のあり方そのものを見直す作業から行わねばならないのだ。

（永井　憲・文学部四回生）

短評

いじめ　教室の病

森田　洋司・清永　賢二　著
金子書房／定価二四〇〇円

「私やクラスの女の子たちは、しばらくの間、傍観者でいました。ヘタにいじめを注意して、火の粉がこっちにかかってきたら大変ですから。」

これは、『ジャンプ　いじめのリポート　一八〇〇通の心の叫び』（集英社、一九九五年）に掲載されていた、クラスの中でのいじめにただただ傍観するしかなかった女の子の言葉である。この女の子の言葉にみられるような、学級内で起こる生徒間のいじめの実態を四層構造（加害者―被害者―観衆―傍観者）としてとらえたのが、大阪市立大学の森田洋司教授らのグループであり、今回紹介する『いじめ　教室の病い』はその森田氏らによって書かれたものである。

さて、同書は「いじめ」について学級集団レベルでの分析をおこなったものである。森田氏らにとって「いじめ」理解の前提として、すべての人間はいじめの潜在的加害者であり、いじめを阻止する「歯止め」があっていじめは止まっているのであるという理解がある。

そのことをふまえた上でまず森田氏らは、「いじめ」を従来からあったいじめに新しい特質が混入した「現代型問題行動」としてとらえ、多くのデータをもとに「現代型」と形容するいじめの特徴を数多くとりあげ考察する。そして、「いじめ」が特定の子にだけにあてはまるのではなく、どの子にもあてはまる可能性をもつ現象としてあらわれ、そのことが「歯止め」の弱化につながっていくことを多くのデータをもとに明らかにしている。

さらに学級に焦点をしぼり、そのなかで生徒と生徒、教師と生徒との相互作用の過程の中で「いじめ」が発生している様子を、四層構造をはじめとした学級における仲間集団の分析によってすすめる。いじめは悪いことだと分かっていてもいじめてしまう子どもたちにとって、学級での友人関係は「集団」というよりも

「群れ」の状態であり、相手の感情において共感構造をもてないでいる。子どもたちの規範意識やさらには加害者、被害者、傍観者、観衆の価値意識の違いをここでもデータを通して考察している。

そして、以上のような学級集団における「いじめ」の分析をおこなったうえで、その背後には現代社会の動向を背景として私事化（「公」重視から「私」尊重への転換）が成熟していないという問題があると指摘し、最後には、「いじめ」克服へむけての親として、教師としていかに取り組んでいったらよいのかについてまとめている。

いじめについて書かれた本は数多く出版されてはいるが、「いじめ」の特徴についてデータをもとにここまで詳しく検証したものは、私がいままでいじめについての研究書を読んだかぎりでは、同書は数少ないう

ちの一冊であったように思う。そして、森田氏らによって明らかにされたいじめの四層構造論はその後、ほかのいじめ研究者によってしばしば引用されるなど、四層構造論がいじめ理解に与えた影響は大きかった。「いじめっ子―いじめられっ子」の関係のみに焦点をあてるのが通例だった従来のいじめ研究に対して傍観者、観衆、教師をふくめた学級集団全体の問題として「いじめ」をあつかった同書の意義は重要であったろう。けれども一方で、腑に落ちなかった点もいくつかある。紙面の関係ですべてを挙げることはできないが、ひとつ挙げるとすれば次の点である。

森田氏らは、「いじめっ子―いじめられっ子」のみの構図ではなくそこに周りでとり囲む生徒、教師を加え、それらが入り組んで「いじめ」を「歯止め」ではなく促進させている様子をデータをもとに描きだしていった。私が腑に落ちなかったというのは、森田氏らによる「歯止めの弱化」＝促進作用の描きかたである。森田氏らは四層構造を中心にいじめの可視性、いじめの一般化、いじめの手口（方法）、いじめ集団の意識調査等をデータをつかってその様子をうきぼりにしてはいたが、いじめられている子が最も苦しんでいた要因をそこからは導くことができなかったし、またそこのところについては同書では言及されていなかったように思う。「現代型」としていままでになかった新たな特徴を指摘した点は意義があったと思うが、特徴を列挙するのに終始していたように思う。それらが子どもたちにとって意味するものにこそ、私たちが問題として考えていかなければならない「いじめ」の本質が隠されているのではないだろうか。

かつては私自身も冒頭で挙げた『ジャンプ　いじめリポート』のなかの女の子のように四層構造のなかに組み込まれて「いじめ」を体験してきた。そして今、その当時のことを振り返りながら自分なりに「いじめ」について整理しようと思っている。

（鈴村まゆみ・文学研究科院生）

短評

ドイツを変えた10人の環境パイオニア

今泉　みね子　著

白水社／定価一八〇〇円

環境問題と聞くと、エネルギーやゴミ、ダムなどいろいろな問題があるが、それらが複雑に絡み合うと、かなりややこしい問題になることもある。昨年京都で行なわれた地球温暖化防止京都会議（ＣＯＰ３）は、日本で行なわれたということで、連日のように新聞やテレビなどのマスコミで取りあげられた。

この会議では、世界的に深刻になっている二酸化炭素等の温室効果ガスの排出削減などについて討議された。その結果、先進国の温室効果ガス排出を一九九〇年に比べて約五％削減（日本は六％削減）することや、各国に割り当てられている排出量を売買し合う「排出権取引」などが認められることなどを採択した。しかし、議長を務めた日本の環境庁長官が国会出席を理由に「議長辞職騒ぎ」を起こしたり、読み捨てられた紙類などのゴミが大量に出て、何を議題にして討論した会議なのかと感じてしまった。また、電力会社などが、「原子力は二酸化炭素をほとんど出さないクリーンなエネルギー」といって、原子力の促進を行なっていたが、放射能の問題などにはほとんど触れることはなかった。

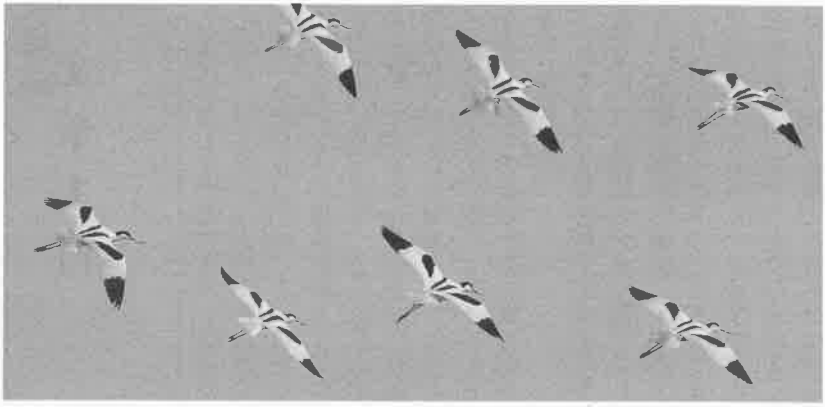
さて、環境対策が進んでいる国として、スウェーデンやドイツなどが挙げられるだろう。特にドイツでは、今年九月に行なわれた総選挙によって新政権が発足し、原子力発電所を廃止する方針を決定した。原発推進をすすめる日本の政策とは全く反対の政策を打ち出した事は、評価できることであり、エネルギー抑制への足がかりになるものとして、私自身期待をしている。

そのドイツに居住している著者が、省エネ、ゴミ問題、資源リサイクルなど、様々な分野で環境対策を行っている人達と出会った経験を基にして書かれたのが本書である。十人の「環境パイオニア」を取りあげ、各章ごとにそれぞれの環境対策について触れられている。

例えば、ドイツでは住宅地に駐車

場が確保されている事が多いが、どの家庭にも車を所有しているわけはないし、車の維持費などの経費がかかる。そこで、自動車を複数の人たちで共有する人が増えている。「カーシェアリング」と呼ばれるこの制度は、一年間の会費を払って会員になり、使いたいときに車があるステーションに連絡すれば、自動車を利用することができる。レンタカー屋に似ているが、住宅地の近くにあることや、ステーションには人がいないために、自動車の点検は各自で行なう必要がある点で異なる。しかし、利用できる車はミニバスから小型の自動車まで自由に使え、しかも車にかかる費用の必要がない。よって、駐車場のスペースを広場などに転用できたり、車の使用回数を減らすことにより、コスト削減ができたりするメリットがある。

また、現在日本で一番話題なっているものとしてゴミ問題がある。特に、豊島の産業廃棄物の問題や能勢町の豊能郡美化センター周辺から世界でも類を見ない高濃度のダイオキシンが検出された問題等があるだろう。日本のゴミ処理対策は、家庭や企業から出されたゴミをどのようにうに処分をするのかということに重点を置いている。一方、三章で取り上げられているヘッセン州カッセル市では、ゴミとなりうるものは、使わないというように、ゴミの発生を未然に防ぐ対策を行っている。例えば、ファーストフード店でコーヒーを飲むとする。その時、コーヒーは使い捨ての紙コップに入れられ、中に入れるクリームや砂糖も、容器や紙包みがゴミとなって捨てられる。そこで市は、ゴミの発生を防ぐために、これらの使い捨てにされる容器などに一定の割合で税金をかけるようにした。そのため、客に出すとき



は、紙コップを陶器の入れ物にし、砂糖やクリームは専用の容器に入れて、必要な分だけ取ってもらうようにした飲食店が増えた。税金の導入にはゴミの省力化という目的があるが、経費節減にも効果が発揮されるだろう。

本書で登場する人たちは環境に対してどうすればいいのかということを真剣に考えている。だから、取り組んでいることについては、できることは徹底的に行っている。一方日本においては、環境対策の面では、国や行政が本腰を入れて対策を行うことは少なく、世界的に見るとかなり遅れているのが現状であろう。一人ひとりが、自分たちの問題として捉えて考えられていない。企業の取り組みは、採算のことが気になるために、あまり積極的には環境対策を実施するようなことはまだまだ少ない。本書で触れられていることをそのまま日本で取り組むことは難しいかもしれない。しかし、私たちがこれらを日本流で対策を行うにはかなり参考になる本であろう。私自身も含めて一人でも多くの「環境パイオニア」が生まれて欲しいと思う。

（大塚　建夫・工学部三回生）

短評

文学入門

桑原　武夫 著

岩波新書／定価六三〇円

文学を志し文学部に入って数年がたつが、いまだに「文学」とは何なのか、わからない。で、どうにかしようと思い立って書店にいって見つけたのが、桑原武夫「文学入門」（岩波新書）だ。本来なら何か文学作品を読む方がよいのだが、なにせマニュアル世代だし、なによりせっかちな性分だから、などと言い訳しつつ短評に移ろう。

「私たちの文化生活のなかで最も重要な地位を占めている文学、これを狭い文壇意識から解放して、正しく社会に結びつけることほど大切な問題はないであろう。なぜ文学は人生に必要か。すぐれた文学とはどういうものか。何をどう読めばいいか。清新な文学理論と鋭い社会的洞察力をもって、文学のあるべき姿と味わい方を平明に説く」。本書を開いて最初に目に飛び込んでくる紹介文だ。この本の構成をよく伝えるている。

一般に文学というと、厭世的な、どこか社会とは断絶した存在のようにとらえられがちだ。文学を志す人や作家というとすぐ世捨て人のイメージが浮かんでくる。だが文学とは、そういうものなのか。社会とは一線を画したところでただ物語をつむいでいればよいのか。そもそも現代社会において、社会とは断絶した一個人などありえるのか。そんなはずはない。では、文学と社会の関係はいかなるものなのだろう。

本書によると、文学とはまずおもしろくなくてはならない。誰もが文学作品を評価するときに、その作品がおもしろいかそうでないか、から始める。そのことからもこれはよくわかる話である。ただ注意すべきなのは、ここでの「おもしろい」とは(interesting)という意味のものであることだ。文学の面白さは人生と密接に繋がっている。人生への(interesting)が文学の(interesting)なのである。だから、人は文学作品から人間を知ろうとし、人生を知ろうとするのである。

文学者は取りあげる題材に強烈な

インタレストを持ち、文学作品へと結実させる。作品化の過程で、いかなる文学者も、イメージを言語という万人共有の道具で表現せねばならない。しかし、イメージを完全に言語化するのは無理だ。規制を受けざるをえない。逆に収穫もある。そうやってインタレストをもって対象に働きかけることが、対象がインタレストに変化を迫ることにもなる。その過程を経るとインタレストに普遍性が宿る。そうした結果としての普遍性が読む者に共感を生む。個のインタレストからの変貌は、文学者にとっての新しい経験となる。現実社会の出来事ではないにしてもだ。つまり新しい価値の生産なのだ。

以上、私的見解も交えつつ、簡単に内容を紹介してみたが、これではさっぱりわかるまい。ようは、この本なり、実際の文学作品なりを読んでくれということだ。「文学とは何なのか」。本書で桑原氏が言っているように、各自で考えて答えを出すしかないようだ。迷える文学部生よ、本を読め！

（若松　武夫・文学部四回生）

短評

生きるための学校

鎌田　慧　著

岩波書店／定価一〇〇〇円

本書を貫く視点として据えられているのが、学校の「閉鎖性」と言うべきものへの批判である。学校は、学校の中にいてはそのあり様を相対的に見ることが難しく、そしてその外の者からすれば、子どもが年齢に応じて一定の期間を中で過ごすことで、何がしかの変化を遂げさせられる「ブラックボックス」のような空間に感じられる。ゆえに、学校の中ではそこに特有の規範なり行動様式なりが、当事者の意識と関係なく生じることになりやすいと言えるだろう。

このことは、つい数年前まで学校に当事者として存在した私たち大学生にとっては、実感のレベルで腑に落ちる事である。ただ、では具体的に学校に特有のどのような規範や行動様式があったのかという点を正確に捉え返そうとしても、それはなかなかに容易なことではない。「生徒」という当事者として、状況にズブズブに埋没しきっていた、あるいは埋没することを要求されていた経験を、そうした角度から今さらに思い返そうとしたところで、誰にとっても茫漠とした感慨にとらわれることは避けられないというべきだろう。

楽しいことも、しんどいことも、そのすべてが学校という空間に特有の学校的トーンが基調にあったことは間違いないのだが、今になってそれが何であったのかをうまく表現することは難しい。そしてこのような点に、「学校問題」を「部外者」がリアリティを持って論議することの難しさが存在するように思う。

そうした中で、学校における日常を、先入観を排しつつ地に足をつけて見つめていこうとする著者の視点は、とてもわかりやすく、かつ有効なものであると思う。自身の体験や実感に基づきつつ、現場からの声を的確に拾いあげるその語り口は、「内と外」「本音とタテマエ」「理念と実践」といった表裏が混然となっている（それが当り前とされる）「学校的状況」とも言うべきものを鋭く

突き、読むものを「そりゃそうだよなあ」と納得させる説得力と魅力を備えたものにしている。

冒頭において著者は、「子どもの世界の中で、学校が大きなウエイトを占めすぎた。…会社員が会社の構成単位である課に閉じこめられるように、学校とクラスが、子どもたちのすべての世界になってしまえば、そこで発生するいじめから、もはや、脱却できない、と子どもたちは思い込んでしまう。」と述べている。学校の外から見れば、こうした感覚は例外的なものに思えるかもしれないが、しかし確かに当事者としてのリアリティが「学校＝世界」というこうした感覚を支えていたことは、私自身も鮮明に思い返せる。

あるいは「劣等性の弁」として、学校が子どもたちにとって相対的な「どうでもいい」ものであった時代を振り返りつつ、教育が選別の道具となってしまっている現実に批判的にも触れている。閉鎖的な学校への子どもの生活全体の囲い込みという現実の中にあって、にもかかわらずその現実を指摘できない子どもの立場への想像力を働かそうとする著者の姿勢にこそ、私達は着目する必要があるのではないだろうか。

（烏丸　通夫・社会学部四回生）

短評

母は枯葉剤を浴びた

ダイオキシンの傷あと

中村　梧郎　著

新潮文庫／定価六六七円（税別）

「母は枯葉剤を浴びた」―この本を読んだのは、小学生の時である。家族の誰が購入したか忘れてしまったが、何気なく手にとったのである。まず、ページをめくると写真が目に飛び込んできた。癒合二重胎児のベトとドクの笑顔。ホルマリンにつけられた無脳症児。悲しみにくれるベトナム戦争の米兵の遺族。どれもが衝撃的であったのを覚えている。

ベトナム戦争の最中、米軍は「枯葉剤」をベトナムの大地に大量に散布した。作戦決行の名目は、ジャングルに潜むゲリラを掃討すること、そして彼等の食料源を断つことであった。この枯葉剤作戦によって、ベトナムの豊かな自然は破壊され、そして「猛毒ダイオキシン」による被害が発生した。

ベトナム戦争において、このダイオキシンの毒性を枯葉剤を製造していたメーカーが認めている。いわば、ベトナムの大地は壮大な「人体実験の場」として、枯葉剤をバラ撒かれたのだ。

私たちは、このような状況を知った時、憤りを感じると共に、無責任な「命を命とも思わない」ことをしでかす人間という生き物に情け無さが込み上げてくる。自分さえ被害者にならなければよい、あるいは被害者がいることさえ頭にない、という

のが加害者の発想なのだろうかと考える。

米軍の飛行機から散布される枯葉剤は、ベトナムの兵士の上に降り注ぎ、畑の作物に付着し、ベトナムに住む人々の体内に取り込まれた。一方、飛行機に搭乗し、作戦を実行した米兵が安全だったかというと、そうではない。当時、米軍はこの枯葉剤を「人畜無害」と宣伝していた。帰国後、後遺症が発生し、それに苦しむ帰還兵の姿も、この本では記されている。文中にでてくる「兵は捨て駒」という言葉が印象的だ。

そして今、この人類が造り出した猛毒ダイオキシンは、妖怪のように私たちの生活に浸食している。

日本社会は、ゴミの燃焼施設から排出されている高濃度のダイオキシン汚染に揺れている。連日のように、マスコミが取り上げ、住民の必死の訴えがブラウン管を通じて報道される。

しかし、行政がとる対応は極めて場当り的なもの、責任逃れを目論むものでしかない。

聞いた話によると、大阪府能勢町の焼却施設の問題も、露骨な住民分断と、事態が風化するのを待つことに、行政は奔走しているという。

誰もが責任をとらない状態。それが今の日本に蔓延している。その結果、どれ程の人々が尊厳を奪われるのか、ということに考えが及ばない。ベトナム戦争での人体実験のような枯葉剤作戦は人間として責任のとれる行為だろうか。そして、世界でも最悪に近いダイオキシン汚染にさらされている日本において被害が現実化したとき行政やメーカーは、その過ちを認めるだろうか。

ベトナムで起こった現実から私たちが学ぶことは多いだろう。

（榊　高尋・卒業生）

連載

日本中国 ことばの往来（ゆきき） その58

風化――黒白を超えて

芝田 稔

中国大陸で戦時中に日本軍占領下の政府で働いたことのある中央の高位高官はもちろん、地方の吏員に至るまで、戦後間もなく逮捕され、国民政府の裁判を受けた。そして国家に反逆した「漢奸」①として、それぞれ処刑されたり、大小の処罰を受けたのであった。だが、四九年新中国が誕生して以来服役者や未決囚は、再度取調べを受けて処罰されたり、或は新しい人民政府の下に、その人物の能力に適した職が与えられて、余生を全うするとともに国家社会に貢献できた人もいたことが、この五十余年間に除々にではあるが明るみに出てきたのである。その例はまだ少ないけれども、余人を以て代え難い優れた人物と認められれば、以前「漢奸」のブラックリストに入っていた人物でも、天下晴れての公民として、自己の長所を伸し切る道が与えられていたことが明白になってきたのは喜ばしいことである。

この場合、漢奸の処理に当り、重要な審査基準は二つある。その人物が曽て在職中に一般大衆に対してどのようなことをしたか？①「血債＝人民を殺害した罪行」の有無②「民憤＝人民の人物に対する怒り」の度合い、この二点である。この重大な関門を越えた人物で、さらに専門の知識や実務能力のあることが証明され、しかも有力な保証人の推薦が加われば、適材適所に配置され、生

活が保障されて社会国家にも貢献できたのである。

傅東華の場合

その一人は傅東華である。この人は日中戦争が勃発した後、老母を連れて家族全員が北平（当時北京の呼称）を後にして故郷の浙江省金華県へ引っ越し、老母の孝養に努めていた。ところが一九四一（昭一六）年日本軍が金華地区を占領した時、傅村の知識分子として逮捕された。これを知った曽ての彼の学生で、その頃杭州市政府に務めていた一人の役人が彼の身分を保証したので釈放されることになった。そして杭州市の「法制室主任」という肩書だけの職名をもらい、平穏に暮したのも束の間、彼の名声を知っていた周佛海[2]上海市長から「上海市文教委員」に任命された。彼は全期間を通じてただの一回だけ蘇州の「清郷訓練班＝郷村農民の抵抗を弾圧するための訓練機関」で国文学の講義をしたことがある。当然のことながら、その講師名簿の筆頭に彼の姓名が明記されてあった。

この故に彼は解放後も、身を謹んで一切政治とは縁を切り、何事にも表面に立つことをせず、静かに余生を送っていたのであるが、五〇年代に周揚[3]から連絡を受けて北京へ移住し「文字改革委員会」の研究員として漢字の研究に没頭することになった。

六〇年代後半再び上海へ戻され国家的事業の一つであった「辞海」の改訂編集の一員となり、同辞典の〝見出し漢字〟（一万四千八百七十三字）の釈名に取組んだ。もちろん文革中は職場から追われて約三年半にわたり上海の「牛棚＝批判対象の人物を軟禁した牛小屋のような宿舎のこと」で苦役に従事させられたが、七一年周恩来総理の「国家的出版事業を優先しよう」との呼びかけがあり、七二年から編集業務に復帰したのであった。

この「辞海」は七九年十月、建国三〇周年を記念して出版（三分冊）され、その縮刷本[4]（一冊本）も翌八〇年八月、上海辞書出版社から出版されている。その巻末の「辞書編集委員会」名簿によると、傅東華の名は「本書改訂に従事し已に故人となった編集委員及び主要執筆者」一〇九名の中に見える。

彼は民国初期に無錫国学専修館で諸子百家の古典文学を治めたが、五四以来新文学運動の面でも活躍し、独学で英文にも長じていたことから、北京師範大学附属中学で教鞭をとる一方、作家活動を続けていた。一九三七年日中戦争以後は前述の通りである。なお一九八三年には辞海編集委員会主催の「傅東華追悼会」が開催され彼の功を讃えた。

段宝坤の場合

もう一人は段宝坤という人物である。この人は戦争末期の一九四五年四月に旧満州の佳木斯（チャムス）市長に任命され、その八月日本軍の敗戦後、直ちに中国共産党軍に逮捕された。やがて張聞天[5]が佳木斯に到着すると漢奸に対する取調べが始まった。

段宝坤は一九三二（昭七）年東京帝大工学部採礦科を卒業、以来一礦山技師として活躍していたが、四五年四月佳木斯市長に任命され、市長としての経歴はわずか半年足らずであり、曽て礦山技術者として可成りの成績をあげていたという。

その点を考慮して彼に対する評価は①今後の東北地方復興のために必要欠くべからざる人物であること②一般人民の彼に対する感情は悪くない。特に権力によって大衆を殺害したことはなく、また大衆を虐げて義憤・攻撃の爪弾きを受けていることを聞かない。さらに③当時双鴨山炭礦では高級技術者の必要に迫られていた等の条件が加わったことから、当時長官として佳木斯入りした張聞天は、彼を双鴨山炭礦で労働改造することに決めた。

この決定は正しかった。同炭礦は彼が現場で働いてから連続三年間、各種の方法を考案して出炭増産を実現したのである。そこで張聞天は段宝坤から漢奸罪の帽子を取り除き正式に同炭礦の技師長に任命した、という明るい逸話である。

周作人の場合

以上のように明るい情報が漏れてくると、つい漢奸の汚名を背負い、公的福祉は受けられず文筆によってやっと生活を支え、孫か曽孫のような紅衛兵から暴力を受けたのが元で〝文革〟の翌年に死亡した周作人やそれほどひどくなくても、周作人を頂点とする人脈関係を保っていた特定の中国学者や文化人――今は殆ど故人になっているのであるが、彼らの業績を知れば知るほど、後の祭ではあるけれども、国家社会の損失ではなかったかと口惜しく思う人が現れて来るのも最近の事実である。

戦時中に北京での高等教育に携わった特定の人といえば先ず周作人と銭稲孫の両氏があげられる。周作人は教育督弁兼北京大学文学院長、銭稲孫は北大校長兼日本文学系主任であったので一九四五年八月漢奸として国民政府によって逮捕され、共に有罪判決を受けて服役中であった。

周作人は四九年一月南京解放後共産党政府の手で仮釈放され、上海を経て北京の旧宅へ落着くことができた。以来二度と獄舎に収容されることがなかったし、当初は旧友たちの執筆依頼が絶えず、社会福祉は受けられなかったけれども生活費を賄うには十分であったようだ。だが三反、五反運動の高まりとともに執筆出版はままならず、六〇年後半、文化大革命の下では批判闘争の矢面に立たされ、薬代を知人に借りたり、骨董品を処分したりして糊口をしのいでいたという。そして文革の翌六七年五月六日八十一歳の生涯を閉じたのである。

周作人の日記は読書人にとって、貴重な存在である。何しろ一八九八（明三一）年二月一八日から始まり一九六六年八月二三日まで、六八年半も続いていたそうであるが、その最後の日記には「晴、午前毛沢東の文芸論を閲読す…午後王耀辰（在北京の旧友）宛の返信を吉宜（内孫周吉宜氏）が出してくれる…」と認めてあり、これが絶筆となった。というのは、その翌八月二四日には紅衛兵が家宅捜索と批判闘争に入り、以後何回も続けられたという。その後のある日「身嗜みのよかった周作人が今は見るに忍びない姿で、台所の土間に板を敷いたばかりのベッドに横たわり、青ざめた顔で苦しみうめいていた。それだのに紅衛兵たちは皮のベルトでひっぱたき、無理に起こそうとしていた。私たちはもはやその場から逃げ出すしかなかったのである…」[6]という訪問者の述懐があるように、紅衛兵の立ち入り捜索があったその日を最後に二度と筆を手にすることなく二四八日目に息を引きとったのである。

戦時中のあの複雑な時期に在って、周作人が対処した行動から見て「決して確固不動の愛国主義者ではないが心から甘んじて犯した漢奸ではなかったと思う」[7]とさえ評価されるまでに至ったのであるし、一九五六年魯迅没後二〇周年記念の際、周作人も招かれて出席し、海外から招かれていた作家たち（主として香港や日本の作家）とも、戦後初めて会って旧交を温めることができた。だがこの好機が返って彼に禍いを招いた。それは他でもない、海外作家たちの帰国後の報告文章や本人との交流通信文が公開されるに及び、海外から来た魯迅生前の兄弟不仲や反動的な文言が取上げられ〝絶対許せない漢奸〟という烙印を一部の有力な人たちから押されたのが、致命的な打撃となった。だが、本人は敢えて弁解もせず〝外柔内剛、温雅の中に鉄〟という生来の意志を通し、自由主義、個性主義を通し続けたのである。これが後に風波を起すことぐらい予測していただろうが、敢えて〝師爺＝師匠の師匠〟らしい性癖を通したところが、さすがは兄弟、魯迅とよく似ているではないか。

銭稲孫の場合

銭稲孫も解放後二度と獄舎に収容されたこともなく、また周作人とは違い、没後であったが漢奸の汚名から名誉を回復されている。銭稲孫も戦時中に日本軍占領下の高等教育に尽力されたことから、公民権が与えられなかったが、月額百何十元かの生活補助を受けていたそうである。先生は清国外交官の家庭に育ち、幼少の頃から東京に在住し、慶応幼稚舎から日本で大学教育を受け、最終はローマ大学を卒業されている。日本語は完全な標準語を話され、古典文学特に万葉集に造詣が深い。のみならず伊、仏、独、英各国の言語や文学に精通され、中国古典文学はもちろん、中国の音楽、美術、漢方医学にも通暁した珍らしい大学者であった。

一九五六年に周恩来総理の「知識分子に関する問題」提起があって以来、中国ではそれまで顧みられなかったか、白眼視されていた知識分子に対しても好意を示し、所謂〝出土文物〟の発掘を始めた。周作人や銭稲孫の西安旅行が実現したのはその時であり、また魯迅没後二十周年記念大会にも参加できたのである。この大変化は人民文学出版社が表面に立って計画し取り仕切ったのであるが、周作人や銭稲孫両氏にとっては、思いがけない運

命を背負うことになったのである。

注

① もとは漢民族の裏切り者を指す。ここでは侵略者の手先となり国家民族の利害を売り渡した中華民族の裏切り者を指す。

② （一八九七～一九四八）湖南人、二一年七月日本留学中に上海での中国共産党第一回全国代表大会に参加、京都帝国大学経済学部卒。二四年中国国民党に加入。前後して広東・武昌両大学及び上海大夏大学教授。三二年江蘇省教育庁長、国民党中央宣伝部長。四〇年後日本軍占領下の汪精衛国民政府行政院副部長兼財政部長、上海市長。日本敗戦後は蔣介石から上海行動総隊長に任ぜられたが、内戦期間中に世論の圧力の下逮捕され南京監獄にて病死。

③ （一九〇八～八九）湖南人、文芸理論家。二九年上海大夏大学英語系卒。三二年中国共産党党員、三七年延安大学校長、華北局宣伝部長。解放後文化部副部長、中国社会科学院副部長、中国作家協会主席等要職を歴任。

④ 『辞海』縮刷本は、七九年発行の三巻本を一冊本に縮刷、八〇年八月出版された。この辞典は三六年上海中華書局から出版されたが、五七年に改訂計画、五八年から着手、五九年編集作業開始、六二年『試行本』十六分冊を、六五年『未定稿』を出版し、以後文革のため休業。七一年周総理の提起により再着手、七九年十月改訂本を発行。編集参加者九六一名。二二一四頁。

⑤ （一九〇〇～七六）中国共産党の理論指導者。上海人、一九年南京にて新文化運動に参加、二〇年日本留学。二一年中華書局、二五年入党、ソ連留学、三一年中共中央宣伝部長。以後左翼冒険主義に走るが三四年長征に参加後は毛沢東支持派、抗日戦争は中央幹部教育部長、マルクス・レーニン学院長。国内戦中は東北局組織部長、東北財経副主任。建国後駐ソ連大使、外交部第一副部長。五九年廬山会議で大躍進と農村の人民公社化運動を批判して左遷され、一経済研究員になるが、文革中に迫害を受け無錫で病死。但し七八年に名誉回復。

⑥ 銭理群『周作人伝』五四七頁、魯迅博物館要員の記憶より引用。

⑦ 銭理群『周作人論』四一五頁、附録『当代部分青年眼里的周作人』より引用。

（しばた　みのる・元文学部教員）

連載

《研究余滴》

フランス詩の歴史（その七）

第三章　十七世紀・古典主義時代

（その一　バロックの時代）

山村嘉己

1

古典主義時代とは、フランス人にとってはまさに黄金時代にほかならない。ルイ十四世の絶対政権がどうあろうと、コルネイユ、ラシーヌ、モリエール、ラ・フォンテーヌの名前はフランス人たちの胸に明るい灯をともす。かれらの美しい詩句の一つ二つはどんなフランス人の唇にもすぐ浮かび上ってくる。フランス国立劇場の一隅に飾られたモリエール愛用の肱掛椅子の前に人々はいつでも群れている。

この絢爛たる古典主義を作り上げたのは皮肉にも絶対王政の強い制御のなかで、均整と調和のとれた人工的秩序を守ろうとする理性と良識への信頼であった。かれらにとっては「人間の本性」（Nature humaine）に基づいた「自然らしさ」こそ、普遍的な人間の求むべき態度にほかならなかった。後に市民社会の充実とともに現われ、貴族社会につよい批判を加えたロマン主義によって、かれらへの対立物として名づけられたこの古典主義はそれ故に貴族社会のイデオロギーそのものに違いはないが、一方では、そのロマン主義によって深く愛好された感情とともに、理性が人間を支える二本柱であることを考えれば、いずれの時代にあっても尊ばれるべき二つの人間

の思想態度であったわけで、ロマン主義の衰退期にはまた古典主義の復活が要求され、この二つの主義はすべての時代に、またすべての個々人のなかにもくり返し現われる二つの姿勢ということができよう。

2

その均整と調和のとれた古典主義時代の到来にも、それに先立ってバロック時代と名づける混沌と無秩序の一時期があったことは忘れてはならない。その時期を準備したものは、いうまでもなく前世紀の後半にフランス全土を掩った宗教戦争（一五六二～九八）であった。聖バルテルミー寺院の大虐殺（七二）、アンリ四世の旧教への改宗（九四）、ナントの勅令（九八）と続く事件の数々を詳説している暇はない。しかし、この骨肉相喰む信仰の争いが、平静に見える十七世紀の、少なくとも前半の底辺には暗い影を落していたことは無視できない。バロック（baroque）の文芸とはその傾向の噴出ともいえるもので、もともとポルトガル語で「ゆがんだ真珠」を意味するが、美術用語として用いられていたのを文学に適用したものである。感情の激発、変化に富んだ動き、劇的な効果の追求、誇張した表現などが見出される。作家としての代表には宮廷詩人フィリップ・デポルト

聖バルテルミー寺院の虐殺

(Philippe Desportes 一五四六～一六〇六)、宗教詩人デュバルタス (Guillaume du Bartas 一五四四～九〇)、とくに激情的な『宗教詩集』(一五八八) を著わしたジャン・ド・スポンド (Jean de Sponde 一五五七～九五) などがいるが、忘れてならないのは、アグリッパ・ドビニェ (Agrippa d'Aubigné 一五五二～一六三〇) の名であろう。

ドビニェはサントンジュのサンモリで新教徒の家に生まれた。熱烈な新教徒であった父は、幼いかれをアンボワーズに伴い、その城にさらし首にされていた新教徒たちを示して復讐を誓わせたという。この経験がかれの生涯を貫く反旧教の闘いを展開させる原動力となった。一方、かれの父はかれに幼少の頃からギリシャ語、ラテン語、ヘブライ語などを習わせる人文主義者(ユマニスト)でもあったので、ドビニェには高い教養も十分与えられていたのであった。十七歳の頃より詩を書き始めたかれは、ロンサールに歌われたカッサンドルの姪デイアーヌ・サルヴィアチ (後のマントノン夫人) に思いを寄せ、恋愛詩『春』(Le Printemps 一五七四) を発表したりしていたが、二十四歳のときアンリー・ド・ナヴァールの救出にかかわり、以後かれの相談役になった。もっとも九三年のアンリ四世の改宗後はスイスのジュネーヴに移り、実際的な運動とは遠去かったが、改革派の精神は失うことなく、七七年以後、断続的に書き続けていた叙事詩『悲愴曲』(Les Pragiques 一六年刊) を完成した。

アグリッパ・ドビニェ

この詩集は七巻から成り、宗教戦争で荒されたフランスの悲惨を嘆き、王侯や司法官の堕落を攻撃し、流血と殺戮の巷を描きながら、最後の審判の神の来臨を黙示録的に描き出す雄大な構成を持っている。その感情の昂ぶる余り、詩のリズムは荒々しく、晦渋であるが、その独特のリアリズムは現在においても決して見劣りはしない。「思想は矯激で狭いが、その力強さ、幻を見る目の深さは比類がない。一九世紀のユゴーの『懲罰詩集』にその

反響が見られ、ダンテ、ミルトンに匹敵する宗教詩人とも目される」（白水社　フランス文学史　七四頁）と激賞する向きもある。

3

この混乱と騒擾の後に「ついにマレルブ（François de Malherbe　一五五五～一六二八）がやって来た」と、ボワロー（Nicolas Boileau　一六三六～一六七二）に歌われた詩人が姿を現わす。いわゆる古典主義詩人の登場である。

「かれはフランスで初めて、詩句のなかに正確な律動を感じさせ、所を得た言葉の力を教え、詩神をして守るべき規則に従わせたのであった」

と、ボワローは続けている。この詩は一六七四年に書かれている。ルイ十四世の即位は一六五四年、かれの親政は一六六一年以来続き、理性と礼節を旨とした絶対主義的な政治が展開されていた。この政治体制の文学への適用がボワローの『詩法』（L'Art poétique　一六七四）にほかならなかった。マレルブは本人の自覚以上に古典主義のイデオロギーに仕立てられているのかもしれない。一六〇九年に書いた「美わしきカリストに」などにはまだ叙情に向うかれの姿がのぞかれる。

フランソワ・アレルグ

カリストほど美わしいひとはどこにもいない。
それは自然がすべての力を注ぎ込んだ存在（もの）、
われらが時代はかくもすばらしい宝物を見て
その栄光を讃える碑ひとつ立てぬとは忘恩の至り。

その輝く肌色は薄れはてることもなく、
口中にはパルサムの香りみち　口辺にはバラの花咲き
その語る言葉は死者をよみがえらせるが
その巧みも自然に溢れる優しさには勝てぬ。

白い胸許は見る目を眩惑し
瞳にこもる愛情は矢のように溢れ
かの女をまるで生きた奇蹟のように仕上げている。

こんな無限の優雅と魅力を見れば
わが理性よ　何と思う？　判断なんか
できると思うか　崇めないでおれると思うか。

ここにマレルブの生涯を辿ってみると、かれは一五五五年カーンのあまり豊かでない法官の家に生まれ、自らも法律の勉学にいそしんでいたが、結局は貴族の従身の道を選び、一五七六年にはアングレーム公に仕えるに到った。その後、二度ほどノルマンディに赴いた点を除くと、ほとんどプロヴァンスに住むこととなる。さらにアングレーム公の死後は、アンリ四世、マリ・ド・メディチと有力な王、豪族に詩などを捧げ、その寵を得ようと努めたが、あまり成功せず、一六〇五年ようやく「リムーザンに赴く王のための祈り」がアンリ四世の心を惹き、年金つきの詩人として認められ、それはルイ十三世のもとまで続いたが、二八年、喧嘩に巻き込まれて死んだ息子の裁判への王の保護を願う旅の途中で命を失っている。

生涯そのものは不遇であったが、かれの詩はすでに述べたように、古典主義理論の典型――もちろんまだ粗雑なものではあったが――として広く認められるに到った。ロンサールへの対抗として、かれは詩にインスピレーションの奇蹟を求めることはせず、個人的な抒情に走ることはなかった。かれにとって詩とはあくまでも技巧的な創作物であり、雄弁に向う情熱をいかに制止し、イメージにいかに堂々とした強さを与えるかよく考えぬかれたものでなければならなかった。古代や異国趣味の言葉などに目を向けず、日常的な語いを大胆に使うことを奨めた。「セーヌ川の人足たち」の使うような言葉の使用を奨めたのは有名だが、それも「卑俗に陥らぬ」限り許されるものであった。

かれにとって詩の言葉は完璧な道具でなければならず、そのためには言葉が貧弱化することも避けはしない。何よりもかれが求めたのは厳密さであり、明晰さであり、調和であった。かれは制限の効果を信じていたのである。要するに詩人は《すぐれたシラブルの調節師》（ラカンへの手紙）であり、《よい詩人とは国家にとっては、せいぜい九柱戯の達人程度しか役立たないもの》であったのである。しかし、この完璧な技巧、表現の洗練は、つづく古典主義美学の基礎を築いたもので、かれ自身が豪語したごとく《マレルブの書いたものは永遠に続く》と信じ

られていた。

4

この技巧師マレルブの周囲には、先ずかれに連る詩人としてメナール（François Maynard 一五八二～一六四六）とラカン（Honorat de Bueil, marquis de Racan 一五八九～一六七〇）の名をあげることができる。前者は寸鉄詩（エピグラム）、オード、ソネなどに美しい作品を残し、後者はマレルブの弟子として牧歌や悲歌にさわやかな抒情詩を残している。

わが魂よ　いざ行かんかな　わが力はすでにつき
わが最後の日は地平の下に沈まんとす。
汝（な）が自由の去るを惜しむか　ああ　汝はすでに
六十路（むそぢ）にわたる因われの暮しに疲れはてたにあらずや

（メナール、小曲）

一方、対立者としてはレニエ（Mathurin Régnier 一五七三～一六一三）、ヴィヨー（Théophile de Viau 一五九〇～一六二六）の名が挙げられる。レニエは諷刺詩 Satires で有名だが、マレルブに対して言葉の自由な使用をすすめ、豊かなイメージに溢れた作品を書いた。ヴィヨーはユグノーの一派でリベルタンの代表であったが、迫害のために若くして死んだ。しかしその作品にはJ・ルースロが『フランス詩の歴史』（ク・セージュ）のなかで、「この四行でヴェルレーヌを先取りした」と激賞するつぎの詩句

この人気ない　暗い谷間で
鹿は水音に合わせて鳴きながら
小川の流れに目をやって
あきもせず　自分の影に見入っている

を残し、自然と自然さ、生きる喜びと表現する喜びとを十分に示している。

（かくてバロックの混乱の後、コルネーユ、ラシーヌ、モリエールによる古典劇の全盛時代を迎えるが、それらを詩の歴史にいかに組み入れるかは難しい問題を提起するので、次回で詳細に考えてみたい）

（やまむら　よしみ・文学部教員）

連載

おいてけぼり

――宮本輝試論 X――

芝田啓治

十三、〝おいてけぼり〟そして出発

(4) 反教育――ヘルマン・ヘッセ――

ヘルマン＝ヘッセは、現代ドイツを代表する詩人の一人で、第二次世界大戦終結の翌年ノーベル文学賞を受賞している。しかし、彼の人生は波瀾に富んだもので、教育に、政治に、社会にアンチの立場で自らを貫き、闘い続けたと言えよう。ここでは、教育と関わり深い青年時代にスポットを当ててみたい。

ヘッセは、一八七七年南独シュバーベンのカルプに生まれ、父母は共にキリスト教の宣教師として活躍しており、厳格な家庭で育ったのである。母方の祖父も又熱心かつ優秀な牧師であり、ヘッセは三代目を目指す運命にあった。

「みんなは、だれも父をついぞ理解しなかった。私だけが父を完全に理解する。なぜなら、私は、父のように、ひとりぼっちで、だれからも理解されなかったのだから」

（ヘルマン＝ヘッセ「思いでに」）

父親は、学者肌で、道徳的な面白みのない潔癖な牧師であった。それゆえ、青年ヘッセとの距離はかなりあったものと考えられる。それに対して、母親は、ヘッセにとって近しい存在であり、父にない全てのものを有し、

暖かく見守っていたのである。

「お話したいことが、たくさん、たくさんありました。私は随分と長いあいだ異郷に暮らしましたが、いつの日にも終始私を一ばんよく理解してくれたのは、あなたでした。」

（同「わが母に」）

といった家庭環境の中で、祖父の影響もあり、三代目を目指してヘッセは歩みを始めたのであった。

「そこで彼の将来ははっきりきまっていた。というのは、シュバーベンの国では、天分のある子どもにとっては、両親が金持ちでないかぎり、ただ一つの狭い道があるきりだったからである。それは、州の試験を受けて神学校にはいり、つぎにチュービンゲン大学に進んで、それから牧師か教師になる、という道だった。」

（同「車輪の下」）

「車輪の下」の主人公ハンス・ギーベンラート少年は、即ち若き日のヘルマン・ヘッセであり、この単線化された道を選び、かつ歩み始めるのであった。その道は狭く険しく、無味乾燥でもあるが、しかし、このコースを歩み始めることは、極少数の超エリート集団の栄えある仲間入りを果たしたということを意味するのであった。

「私たち数人のギリシャ人は、その学年の初めから、名声に向かってこの狭い道を進むようになり」

（同「中断された授業時間」）

その小さな集団は、神学者を目指し、又、難関の試験を受けるべく、他の生徒たちとは違い、特別にギリシャ語を放課後学んでいたため、ギリシャ人と称されていた。そのようなエリート意識と不安の狭間の中で、ギリシャ人の少年たちは揺れ動くのであった。

「教室の中で時間から生命を吸いとり、時間を驚くほど長く引きのばす味気なさも目に見える緊張」（同）の中で、一日一日を過ごすのであった。そして、少年の持つ柔らかな感性を抑えつけていくのである。

「去年、試験のために、魚釣りをとめられたとき、彼は身も世もあらずわんわん泣いた」（同「車輪の下」）このような幼さをも兼ねている少年なのである。

実際、ヘルマン・ヘッセもハンス・ギーベンラートのように期待され、かつその期待に応えて、一八九一年七月マウルブロンの神学校に見事合格し、九月入学を十四歳で果たしている。

「ここの連中ときちゃ、……退屈な、卑屈なやつばかりだ。やたらにあくせくと勉強するだけで、ヘブライ語のアルファベットより高尚なことはなにも知りゃしない。」

（同）

「きみはどんな勉強でも好きで、すすんでやってるの

じゃない。ただ先生やおやじがこわいからだ。一番か二番になったって、なんになるのだい？」　（同）

と、学問というより、学校に於ける詰め込みの教育に対する嫌悪や疑問が湧き起こって来るのであった。同じ路線を、同じ車輪の下をただ盲目的に走り続けてよいのだろうかと悩むのである。

そして、心の中で芽生えた疑問が大きく大きく育ち始めるのである。進んで来た路線から離れようとしたり、又、立ち止まろうとすると、学校の先生からの叱責や罰が待ち構えており、情け容赦ないのであった。

「先生の罰には、父のように愛を伴っていなかったから、学校は初めから十四歳まで終始強制機関の息苦しさを持ち続けた。」　（同「両親あての手紙」）

神学校の教育に疑問を持ち、教師に不信感や不満感を抱き、自らの進むべき道が見えなくなった時、少年はこの泥沼から抜け出す術も知恵もなく、ただもがき苦しむだけであった。そして、焦れば焦る程環境がより一層重くのしかかり、友人も一人去り二人去り、教師の理解も修復されることなく、狭い世界をより狭くし、息苦しくなっていくのである。

「天才と教師連とのあいだには、昔から動かしがたいふかいみぞがある。天才的な人間が学校で示すことは、教師たちにとっては由来禁物である。教師たちにとっては、天才というものは、教授を尊敬せず、十四の歳にタバコをすいはじめ、十五で恋をし、十六で酒房に行き、禁制の本を読み、大胆な作文を書き、先生たちをときおり嘲笑的に見つめ、日誌の中で扇動者と監禁候補者をつとめる不逞の輩である。学校の教師は自分の組に、ひとりの天才を持つより、十人の折り紙つきのとんまを持ちたがるものである。」　（同「車輪の下」）

神学校に於いて、ハンスの唯一の友人である天才ハイルナーは、神学校の教育と寮生活を紙くずかごと批判し、寮より脱走し、結果的には放校処分となってしまうのであった。取り残されたハンスは、周囲の目に傷つき、一層孤立化し、遂にノイローゼになって、それ以上学校生活を続けられなくなり、帰郷し退学するのであった。

ヘルマン・ヘッセ自身も「車輪の下」の主人公ハンス同様、入学してほぼ半年後に、マウルブロンの神学校を逃げだし、退学している。その後、精神療法を受けるが好転せず、持病の頭痛も一層激しくなり、そこから逃れるには生命を断つより仕方ないと思い詰め、自殺未遂をも引き起こしている。内面の解決をみないまま、退学をして半年後、親の期待もあり、再びカンシュタットの高校へ入学するも、結果は火を見るよりも明らかであった。

「私は高校で勉強を続けようと努力したが、そこでも監禁と退学が結末であった。」　（同「自伝素描」）

この高校でも、ヘッセは天才として振舞い、学校や教育という枠組みの中に収まりきれていない。

「青年がおとなしく歩道を歩いていたら、化石となってしまう。」　（同「デーミアン」）

「ああ、ぼくは、本当のところ年をとりたくてたまらない。青春なんてものは、まやかしにすぎない。新聞や読本がでっちあげたまったくまやかしだ！　人生の最も美しい時代だって！　とんでもない。」

（同「ゲルトルート」）

青年の焦りが目に見える。学校を奴隷の檻と感じ、教師を檻の中の小権力者と感じ、勉強が自由を奪う装置だと感じた時、青年は歩みを止め、閉塞感を抱かざるをえない。八方塞がりの状態となってしまうのである。このような重くて、深い〝おいてけぼり〟感に苛まれた時、青年は車輪の下で自由を奪われ、自らの死についても思いめぐらせるのであろう。この生に対する倦怠をどうはね除けうるのか。古今東西、多くの青年を苛立たせるテーマでもある。

ヘッセの場合、二度の退学により、自らが学校に不適応であると感じとったのである。生きていくためには、他の道を探し求めねばならない所に立たされるのであった。

「自分は神学校生徒として、時々自殺しそうな気持ちになったのに、なぜ首をくくらなかったかと言えば、結局自分の中の生の意志が死より強かったからだ。……芸術家の喜びと好奇心が私にとって死よりも生を好ましいものにした。」　（同・一九五一年一月の書簡）

人が、特に青年が、学校から〝おいてけぼり〟を喰っ

た時、打ち拉がれ、悩み、死すら覚悟するときもあろう。しかし、死への恐怖と闘いつつ、漸く一筋の光明を見いだすのである。それは、人により様々な道であろうが。ヘッセの場合、〝おいてけぼり〟の第二段階で苦しむも、詩作の力により救われるのであった。反教育、反学校の立場に迷いつつもその場に立ち、自らの生きる力を捜し求めたのである。掛けがえのない生命や人生を問いなおす機会が、結果的にはあたえられたのである。

「これまで詩人の世界はハンスにとってほとんど未知であり、重大なものとは思われなかった。いまはじめて彼は、美しく流れることば、真に迫る比喩、ほれぼれするような韻律などの幻惑的な力を、逆らいがたく感じた。」

（同「車輪の下」）

「詩が自分の唯一の衝動であり、唯一の愛着であり、唯一の甘にがい喜び」（同・一八九三年五月十五日の書簡）と感じた時、光明を見いだすのであった。この光明を辿って行けば、死なずに済む。生に対する倦怠をねじ伏せることが可能なのである。

このヘッセの歩みは、詩人中原中也のそれと極めて似通っている。三十年程ヘッセの方が先輩ではあるが、反教育の位置から歩みはじめ、幾度も躓きながら詩作のみに自らの生を見いだしていったという点に於いて同質である。

中也も又、中原家三代目の医業を継ぐものと期待され、名門山口中学校へ優秀な成績で入学するも、ヘッセ同様十五歳の時、落第、転校、かつ故郷を捨て、その後も挫折を繰り返している。

「きらびやかでもないけれど
この一本の手綱をはなさず
この陰暗の地域を過ぎる！」

（中原中也「寒い夜の自画像」）

「詩人は英雄と全く同じ運命にあった。……即ち彼らは過去の世界ではさん然と輝いていた。どの教科書も彼

らに対する賛美に満ちていた。だが、現在と現実の世界では、人々は彼らに敵意を抱いていた。」

（ヘルマン＝ヘッセ「自伝素描」）

中也とヘッセは、それぞれの人生の歩みだしは似ているが、決定的な違いがある。それは、中也が三十歳で、人生半ばで倒れたのに対して、ヘッセは一九六二年逝去するまで八十五年の長い人生を生き抜いている。それに、中也は無社会（「書評」No一〇八）という生き方をしたのに対し、ヘッセの場合、社会の方が彼を放置しなかった。第一次世界大戦、第二次世界大戦が彼をも巻き込んでいったのである。特に、ナチスドイツにとっては彼は〝裏切り者〟であり、見過ごしに出来る存在ではなかった。彼は、生活の場をドイツからスイスに移し、孤立、過労、父の死、息子の病気、妻のノイローゼ、自らのノイローゼと闘いながら、かつナチスとも闘ったのである。

「世界は不正に病んでいます。確かに、だが、世界はずっとそれ以上に愛と人道と同胞感との欠乏に病んでいます」

（同・一九三三年三月書簡）

「花が一枚一枚
悲しみの木から落ちる。
空には星がなく、
心にはもう愛がない。……
世界は老い、空虚になる。……
こういう悪い時勢に
だれが自分の心を守ることができよう？」

（同「悲しみ」）

ヘッセの反骨精神と孤独や孤立に負けない生きる力は、少年時の教育・学校から〝おいてけぼり〟を喰い、躓き、傷つき、そして立ち上がり、詩作と共に歩みはじめ、鍛えられ、培われたものである。〝おいてけぼり〟の傷が大きく、深かった分、生きる力は大きく育ち、ナチスドイツとも敢然と闘い、決して負けなかったのであった。

彼は、八十五歳で世を去っているが、その人生の中でのキーワードは〝青春・反教育〟ではなかっただろうか。常にこの言葉を携え、噛みしめ、そして、挑んでいったのである。

「私は疲れ、ほこりまみれて歩く。
私の後ろには、青春がためらいがちに立ちどまり、
美しい頭をかしげ、
これから先はもう私と一しょに行こうとはしない」

（同「はかない青春」）

（しばた　けいじ・経済学部卒業生）

編集後記

今年度の二部の社会学の授業で教科書として使われている『基礎社会学増補2版』（福村出版刊）の五八頁に載っているブック・ガイドの中で、『日本人とユダヤ人』（角川文庫刊）という題の本が紹介されている。その紹介によると、この本は「社会・文化・パーソナリティの三分野にわたってユダヤ人と日本人を比較した評論書」だという。しかし『にせユダヤ人と日本人』（朝日文庫刊）の中で『日本人とユダヤ人』の内容を詳細に検討された東北学院大学の浅見定雄教授は、この本が「作り話の上に成り立っている」ことを挙げて「この一点からだけでも本書の学術的価値はゼロどころかマイナスなのであり、本書の役割は犯罪的なのである」と断定しておられる。アウシュビッツにおけるユダヤ人虐殺を「当然の措置」と考える故・山本ベンダサン氏の差別思想や事実の歪曲について『基礎社会学増補2版』の編者の方々はどのように考えておられるのだろうか。

（五月闇）

※梁永厚先生の御都合により、「在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート」は休載とさせていただきます。御了承下さい。

『書評』編集 STAFF募集!!

『書評』は私たちによる文化形成のための印刷メディアです。あなたも『書評』を創ってみませんか。

「雑誌」に興味のある方、思想・文化活動をやってみたい方は、『書評』編集をはじめ、講演会や映画上映のSTAFFになってみましょう。

私たちは、いつでもあなたをお待ちしています。

★連絡先　〒565-0842 吹田市千里山東3-10-1
関西大学生活協同組合組織部（本部棟3階）
『書評』編集委員会
☎（06）368-7530（直通）
☎（06）368-1121（内線7435 5）

107号

〈特集〉　戦後50年
- 国連50年と日本
- 大阪大空襲と戦後50年
- 被爆問題と天皇制
- 戦後教育50年考
- 終戦50周年フィリピンの場合
- 国民経済の黄昏

〈寄稿〉
- 震災と復興

〈連載〉
山村嘉己／蘆田東一／芝田啓治／芝田　稔

110号

〈特集〉　読書案内
- 自家製「読書のすすめ」
- アードルフ・ヒトラーの「わが闘争」
- 人はどのようにして自分になるのか
- 「道楽」本位
- ラッセル・ボバー・グッドマン
- 自然との付き合い方を見直そう
- タコ壺よ、さらば
- 若い時こそ小説を

〈特集〉教育問題（続）
- 悲劇の散乱

〈講演録〉
「キャンパス分断の問題性」

〈寄稿〉
- 「ひどさ」については、シバさんあなたも敗けていませんね。

〈連載〉
芝田　稔／山村嘉己／芝田啓治／梁　永厚／蘆田東一／三谷　真

108号

〈特集〉　読書案内
- 孤独の日々に良書に出会う
- 「脱学校の社会」
- 反面教師としての私の経験
- 目的設定型読書と快楽追求型読書
- ことばに惚れる
- 「歴史体験」としての読書

〈寄稿〉
- 震災二年目のモノローグ

〈連載〉
芝田　稔／山村嘉己／芝田啓治／梁　永厚／蘆田東一

111号

〈特集〉　読書案内
- 「インターネット法律問題Q&A集ー「サイバースペース法」入門」　山下幸夫 著
- 人権問題をめぐる本の紹介

〈連載〉
芝田　稔／山村嘉己／芝田啓治／梁　永厚

109号

〈特集〉　教育問題
- 大学改革を考える
- 大学はどこへいこうとしているか
- 大学教育の落とし穴
- 我国の科学技術政策と高等教育
- 情報社会における教育を考える
- 近代日本における朝鮮語の教育と研究

〈寄稿〉
- 金文輯と「犬糞倉衛」

〈連載〉
芝田　稔／山村嘉己／芝田啓治／蘆田東一／三谷　真

112号

〈特集〉　読書案内
- 現代版「読書のすすめ」
- 『「世界」主要論文選1946-1995戦後50年の現実と日本の選択』
- 時代を読む
- 『大学改革を探る—大学改革に関する全国調査の結果から』

〈連載〉
芝田　稔／山村嘉己／芝田啓治

季刊　『書評』　1998年 12月　通巻113号

編集・発行　関西大学生活協同組合・組織部『書評』編集委員会
連　絡　先　吹田市千里山東3-10-1（☎368-7530 or 368-1121〈内線74355〉）
頒　　価　250円